

神奈川県出土の土偶

鈴木 保彦

1. 出土土偶の時期及び点数
2. 出土土偶の概要
3. 地域的特徴

1. 出土土偶の時期及び点数

このたび集成した神奈川県出土の土偶は、48遺跡 155点を数える。その内訳は、前期1遺跡・1点、中期21遺跡・79点、後期27遺跡・57点、後期一晩期4遺跡・8点、晩期4遺跡・7点、晩期一弥生1遺跡・1点、不明1遺跡・2点となる。草創期、早期のものは検出されていない。

このうち前期としたもの1点は、横浜市折本貝塚出土のものであるが、後述するように中期のものの可能性がある。また晩期一弥生としたものは、大井町中屋敷遺跡出土のもので、重要文化財に指定されている容器形土偶として著名なものである。内部に粉状の人骨が充満していたという（石野 1935）。石川日出志氏の集成によると同様の例は、14遺跡、17例あり、中部高地に最も多いという（石川 1977）。その容貌、形態から縄文土偶の系譜にあることは明らかであるが、厳密には弥生時代のものであろう。ちなみに宮下健司氏は水神平式期（宮下 1983）、石川氏は弥生時代前期末とされている。

以上のことから前期のものと晩期一弥生のものが消えると、神奈川県出土の土偶は、中期から晩期のものということになる。中でも中期のものが最も多く、次に後期前葉のもの、さらに晩期のものが少数となるが、中期のものは、単純な形態を呈する加曽利E式期のものが大多数であり、勝坂式期のものは少ない。

後期の土偶は、27遺跡から57点出土しているが、筒形土偶およびその可能性が高いものが8遺跡、12点含まれている。筒形土偶は、時期の明確なものは堀之内式期のものであり、その出土例は中部地方の一部から関東地方に限られている。出土例の多いところでも群馬県と茨城県の5点、埼玉県の数点程度であり、総計でも30点前後と大変数の少ないものである（鈴木 1990）。神奈川県は、土偶の出土例の少ない地域といえると思うが、なぜか筒形土偶の出土例だけは最も多いことになる。

また、晩期の土偶7点という数字は、中期、後期からみれば少ないが、神奈川県では後期後半

以降検出される住居址数は激減し、晩期では遺跡そのものがかなり減少するから、住居址数あるいは遺跡数に対する割合からみると決して少ない数字とはいえないという見方もできよう。

2. 出土土偶の概要

図1—1は、「太く短い足がつき、腹部はふくらみ安定がよい」と野口義麿氏によって説明されているもので、野口氏によると諸磯式に伴出したという(野口 1974)。江坂輝弥氏も数少ない前期の土偶の例としてあげている(江坂 1960)。しかし、早期、前期の土偶を集成し、検討した原田昌幸氏によると前期にはこうした形態の土偶は類例がなく、中期のものであろうとされている(原田 1987)。現物は国学院大学に保管されているが、下半身のみが現存するもので、分割塊製作された痕跡が上部に残っており、上半身を含めて全体に立体的なものであったと思われる。原田氏の指摘するように、前期に多い扁平なつくりのものとは形態的に異なる側面もある。中期前半のものの可能性がある。

2, 5は勝坂式期のものであり、割れ口の首の部分の形態から土偶であると思われるが、顔面把手の可能性も考えられる。2は橋本遺跡31号住居址の床面直上から出土したもので、眼孔内に赤彩が残っているという(大貫ほか 1986)。3は尾崎遺跡9号住居址(勝坂式期)から出土した中空土偶である。現高6.5cm、幅9.2cmを測り、完形であれば顔面の幅が11cm位と想定される大形のものであり、両目と口が貫通している。報告者は、右ほほのキの字形等の沈線について、入墨を表現したものである可能性を指摘している(岡本孝之ほか 1977)。4は当麻遺跡35号住居址(勝坂式期)から出土した表裏に顔面のつく両面土偶である。それぞれの顔面の表情から母子と想定されている(白石ほか 1978)。

6—12は、港北ニュータウン地区出土の加曽利E式期の土偶である(岡本勇ほか 1980)。顔面が省略され、手を広げた単純な形態であり、6, 7, 10は正中線にそって、横位の沈線がめぐり、脚部は方形柱状を呈する。8, 9は出べそと脚部の省略が特徴的である。13—15も単純な形態の加曽利E式期の土偶である。16は加曽利E式土器が多く検出されている市ノ沢中崎遺跡から出土した頭蓋骨形を呈するものである(江藤ほか 1980)。類例のないめずらしいものであるが、把手の可能性もある。17は当麻遺跡12号住居址(加曽利E式後半)から出土したもので、これも把手の可能性もある。裏面のSの字状の沈線から後期前葉のものとも考えられるが、当麻遺跡は中期の集落であり、後期は称名寺式期のものが検出されているのみでそれ以降のものは出土していない。やはり加曽利E式期のものであろう。

図2—1, 2, 4—10, 12—13, 16は、橋本遺跡から出土した加曽利E式期の土偶である。この遺跡からは加曽利E式期の土偶が34点出土しているが、破片を含めて多くのものが手を広げ、脚部先端が前に突き出た単純な形態のものと思われる。1例のみ手足の省略された円筒形を呈するこけし状のものがある(5)。1の背面には、X字状の沈線が施されているが、このようなもの

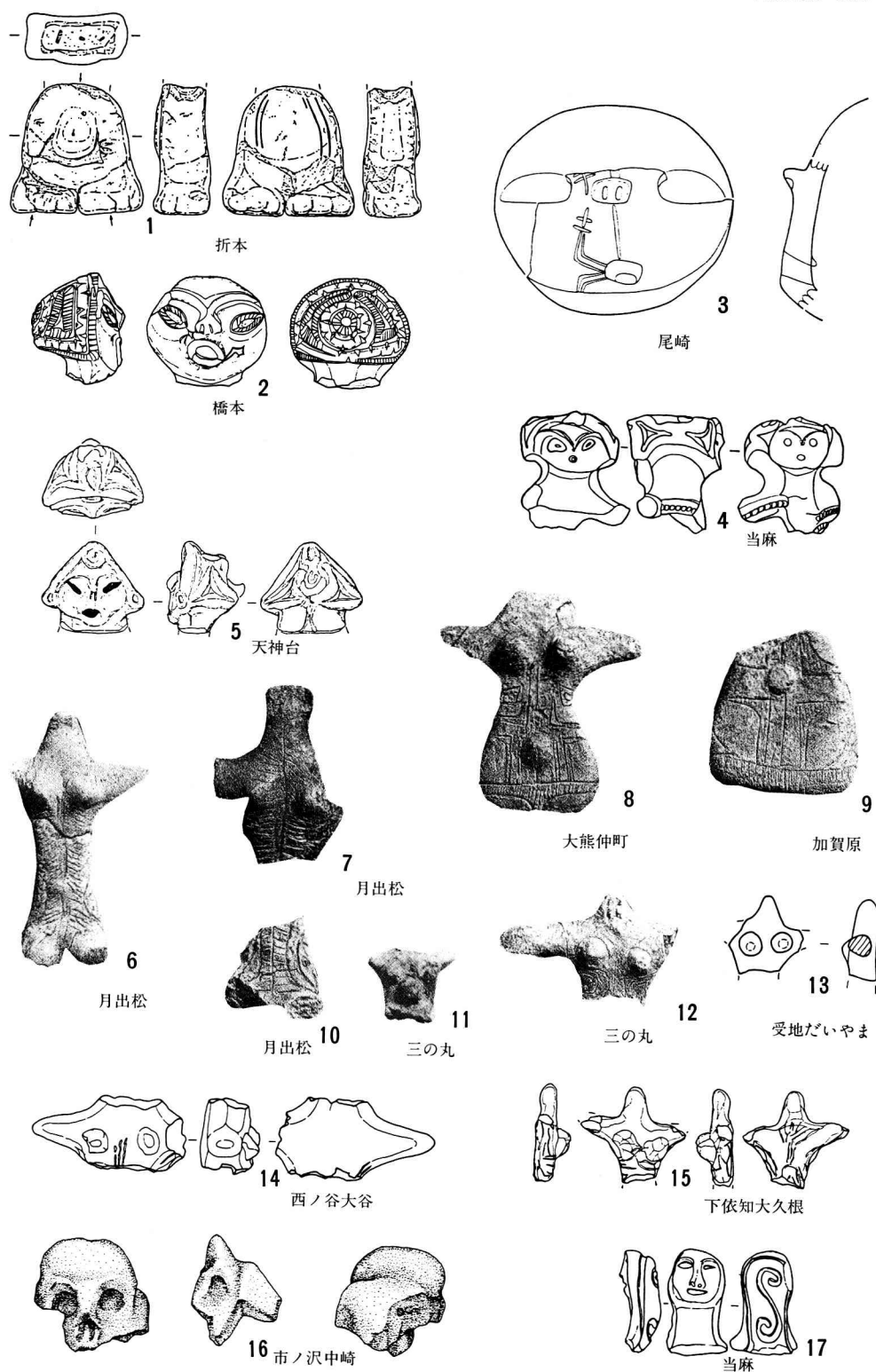


図1 神奈川県出土の土偶(1) 縮尺不同(ただし1-4, 13-15, 17は1/3)

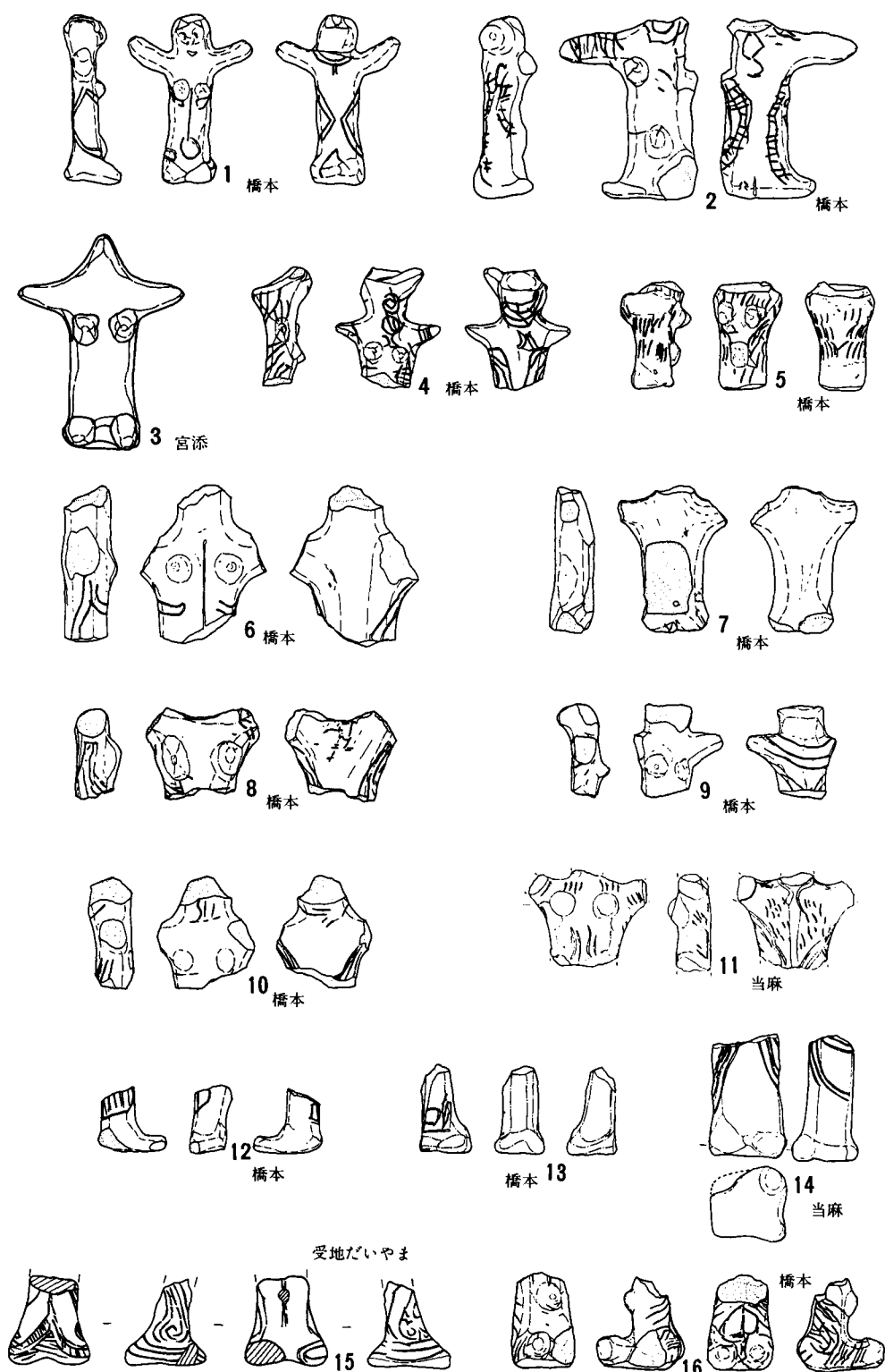


図2 神奈川県出土の土偶(2) 縮尺不同(ただし1-2, 4-16は1/3)

が6点あるという。またこけし状のものの体部には全面に爪形文がみられる。11, 14は当麻遺跡出土のもので、橋本遺跡から多く出土したものと同様の形態と思われるが、11は体部の表裏に橋本遺跡のこけし状のものと同じような爪形文が施されている。14は下半身の破片であるが、脚部が橋本遺跡のものほど前に突き出す方形柱状を呈する。15は受地だいやま遺跡のものであり、加曽利E式期のものと思われるが、脚部は前後に突き出ている。

図3—1—4は筒形土偶であり、5, 6, 9, 10はその顔面部である。11—14も筒形土偶の顔面部の可能性もある。前述のように神奈川県出土例は最も多く、時期の明確なものは堀之内式期のものである。1—4はいずれも典型的なものであり、手足が省略され頸部以下が円筒形を呈する。口から胴部にかけては空洞になり、顔面はあごを上げ斜め上方を向く。1, 3, 4には後頭部から胴上部にかけてアーチ状の把手がつけられる。1, 2には体部に小さな穴が縦位にあけられ、3, 4は体部正面の正中線にそって沈線か隆線がつけられている。これらはいずれも筒形土偶にみられる特徴である。また、2の体部正面には蛇行する沈線が施され、1, 3の裾部には三角形を基調とする沈線がめぐることが、これらは同時期の土器の文様に通じるものがある。

図4—2, 3はやや上向きとなる顔面、肩から下方にのびた短い手、細くくびれた胴部に特徴のあるもので、形式的にハート形土偶と共通する要素がある。野口氏のいわれる立体有脚土偶である。いずれも脚部を欠損するが、おそらく大きく足を開き安定したものであっただろう。1, 4, 6, もこれに類する土偶と思われるものである。1, 2の顔面部はやや上向きとなり、6の胴上半部の破片は、2, 3と同じように胴部が細くくびれている。堀之内式期のものであろう。5は胴上部の破片であるが、肩の部分や背面に沈線が施される。後期前半のものであろう。7は脚部を欠損するが、偏平な土版状を呈するものである。加曽利B1式土器に伴出したという（寺田 1970）。8は顔面部、脚部を欠損している偏平なものであるが、体部の表裏にみられる渦巻き状の文様から堀之内式期のものと思われる。9は顔面、手足を欠損しているが、乳房、腹、腰などにボリュームのあるもので、ほぼ全面に赤色顔料による塗彩が認められたという。野口氏によると熊本県三万田遺跡、陣内遺跡に類例があるという（高山ほか 1975）。後期後半のものであろう。12, 13は足の部分の破片である。12は指を表す沈線を5本入れたため指の数が6本となっている。また甲の部分の5条ずつの交差する沈線は、サンダル状のはきものを表現しているのかも知れない。11は顔面部を欠損するが、金子台遺跡から出土したみみづく土偶である。伴出した土器片は安行3式ということである（赤星 1974）。

図5—1, 2も金子台遺跡出土のものである。いずれも肩から腕にかけての破片であり、後—晩期のものであろう。3は川尻遺跡から出土した顔面部の破片であるが、その周囲に列点文がめぐっている。特に目の横、ほほ、口のまわりにいちじるしく、晩期の有髻土偶の可能性が高い。4, 5, 8は仏向貝塚の表採品、6, 7は仏向A貝塚出土のものである。入組文の施された7, 8は中空土偶である。4は胴上部右側の破片であるが、分割塊製作によるもので、接合部である胴部中央で縦位に割れている（石井 1979）。



図3 神奈川県出土の土偶(3) 縮尺不同(ただし1, 4, 6は1/3)

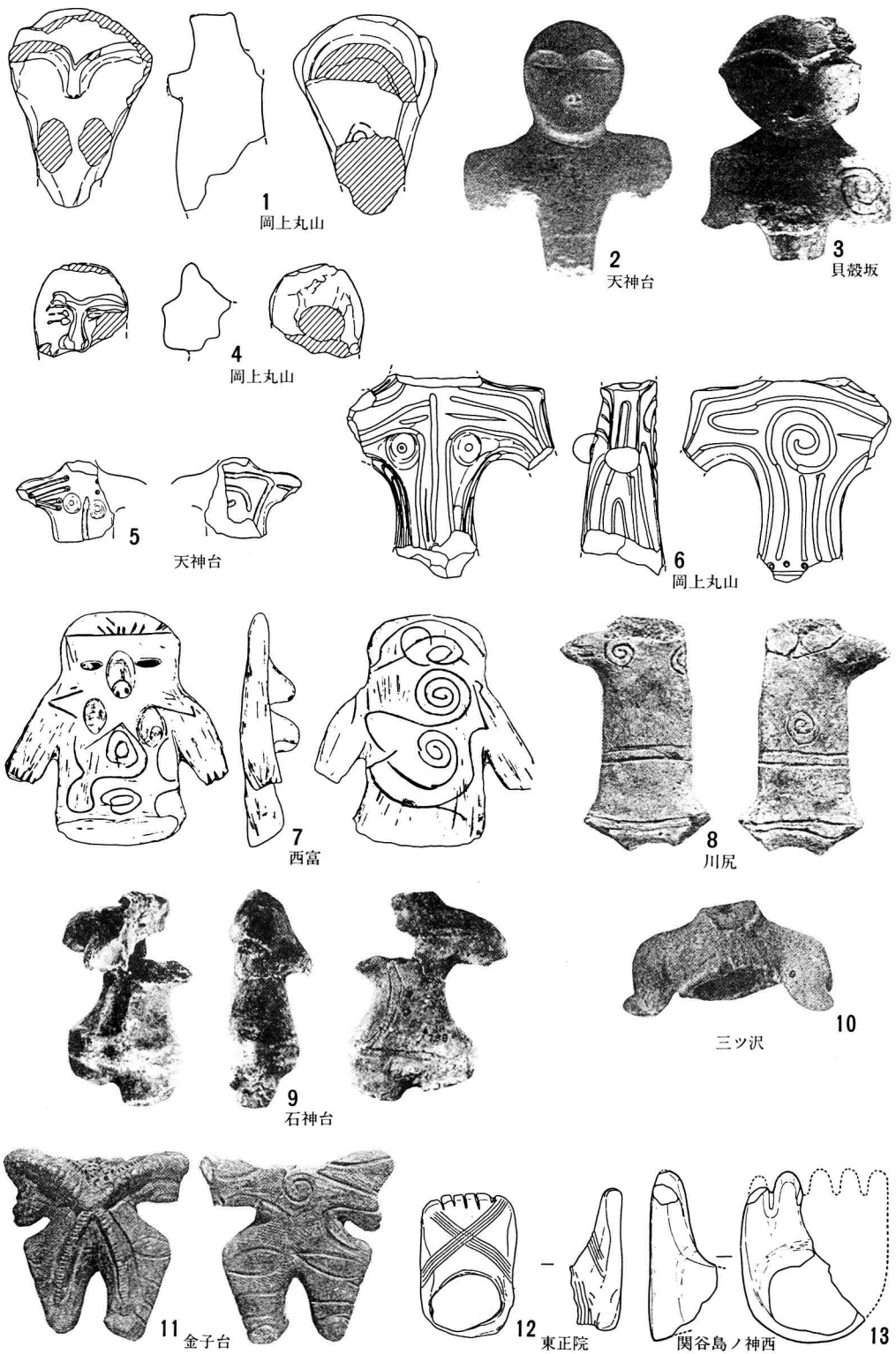


図4 神奈川の土偶(4) 縮尺不同(ただし1, 4, 6, 12, 13は1/3)



図5 神奈川県出土の土偶(5) 縮尺不同(ただし1, 2は1/3)

3. 地域的特徴

神奈川県から出土した土偶の合計は、前述のように48遺跡、155点である。無論今回の集成からもれたものもあると思われ、若干の上乗せもあるものと思われるが、隣接する東京都では、107遺跡、362点であるから(安孫子 1991)、数量的には少ない地域といえそうである。このことを港北ニュータウンの資料を例にして説明してみたい。

港北ニュータウン地域は、横浜市の港北区、緑区にかかる広範な地区が網羅的に発掘調査されており、膨大な遺構、遺物が検出されている(小宮ほか 1990)。坂上克弘氏の御教示によると土偶は、中期のもの11点、後期のもの8点が出土しているほか、あと数点のものが検出されているようであり、合計19点+αとなる。港北ニュータウンにおける縄文時代の遺跡数は、244遺跡であり、同じく縄文時代の竪穴住居址数は、1949軒+多数であり、縄文時代の堀立柱建物址数は、212基である。竪穴住居址を例にとると、その大半は、中期、後期のものと考えられる。そこで非常にラフな計算だが、竪穴住居址2,000軒として土偶の合計数19点で割ると竪穴住居址105軒に土偶1点ということになる。しかし、実際には、華蔵台遺跡で後期のもの6点、三の丸遺跡で中期のもの2点、後期のもの1点が出土しているので、大多数の遺跡では土偶が出土していないことになる。実際に前期の例では、竪穴住居址49軒が検出された西ノ谷遺跡や同じく50軒以上の竪穴住居址が検出された南堀貝塚からは土偶は出土していない。中期の例でも102軒の竪穴住居址

が検出された二ノ丸遺跡、95軒の竪穴住居址が検出された神隠丸山遺跡、さらに後期の例でも45軒の竪穴住居址が検出された同じ神隠丸山遺跡では土偶は出土していない。土偶の出土量が少ないことの実例といえるであろう。

同様の例は港北ニュータウン地域以外にもあり、中期では349軒の竪穴住居址が検出された寒川町岡田遺跡、237軒の竪穴住居址が検出された海老名市の杉久保遺跡などからは土偶が出土していない。こうした状況は、特に神奈川県中央部相模野台地で顕著である。

逆に神奈川県内で土偶の出土例の多いものを抽出してみると、傑出しているのが相模原市橋本遺跡の中期の土偶35点の出土例である（大貫ほか 1986）。橋本遺跡は、神奈川県でも最も北側の八王子市との境にあり、多摩丘陵の末端部ともいえる位置にある。行政区画では神奈川県にあるものの、地理的には多摩丘陵のエリアに含めてよい範囲といえるのであり、土偶の出土状況も相模野台地とは明確に異なっている。橋本遺跡の土偶35点のうち、1点は勝坂式期のものであるが、他の34点は加曽利E式期のものである。その出土状況をみると半数以上の19点が住居址内から出土しており、加曽利E2式期の37号住居址からは6点、加曽利E3式期の40号住居址からは4点が出土している。

橋本遺跡に次いで出土例が多いのが、横浜市青葉区いずみ遺跡の中期のもの10点である。この遺跡も緑区北西端の奈良町にあって、町田市との境に位置し多摩丘陵の範囲内である（二村ほか 1982）。同じように中期の土偶6点が出土した。横浜市緑区上恩田遺跡群、川崎市多摩区宮浜遺跡も地理的にみると多摩丘陵の範囲内である。

後期の例では、鎌倉市の東正院遺跡から7点（鈴木 1983）、港北ニュータウンの華蔵台遺跡からは5点が出土している。中期の例と若干異なり、多摩丘陵の南側に位置する丘陵部からまとまった出土例があることになる。しかし、県央部ではやはり出土例が少なく、中期末から後期前半の敷石住居址21軒をはじめとする、大規模な配石遺構が検出された伊勢原市の下北原遺跡などでは土偶は出土していない。

以上のように、神奈川県における土偶の出土状況は、県央部に少なく多摩丘陵ないし多摩丘陵に近接する地域に多いという傾向がうかがえる。南関東の狭い地域の中でも土偶の出土量に差があるのであり、縄文時代における呪術のあり方は、近接する同一の土器型式内でも決して一様ではなかったのである。今回土偶の集成を通して知り得たことであるが、こうした現象がどのような理由によって起こりうるのかは、縄文時代の社会を考える上で大変重要なことであり、今後の課題としたいと思っている。

神奈川県の土偶を集成するにあたり、港北ニュータウン関係の資料については、横浜市埋蔵文化財センターの坂上克弘氏に、神奈川県立博物館所蔵の資料については川口徳治朗氏に御教示いただいた。また安孫子昭二氏、山本暉久氏、戸田哲也氏には文献、未発表資料等で色々お世話になった。心から感謝したい。

引用・参考文献

- 赤星直忠 1974 『神奈川県金子台遺跡』 横須賀考古学会
- 安孫子昭二 1991 「多摩の土偶」『多摩の歩み』62号 多摩中央信用金庫
- 石井 寛 1979 「横浜市保土ヶ谷区仏向貝塚の資料」『調査研究集録』第4冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 石川日出志 1987 「土偶形容器と顔面付土器」『弥生文化の研究』8 雄山閣出版
- 石野 瑛 1935 「足柄上郡山田村遺跡と出土の土偶」『考古集録』第2
- 植木 弘 1990 「土偶の形式と系統について～東日本の後期前半における3形式の土偶をめぐって～」『埼玉考古』第27号
- 植木智子 1990 「その他の土偶」『季刊考古学』30号 雄山閣出版
- 江坂輝彌 1960 『土偶』 校倉書房
- 江坂輝彌ほか 1974 『古代史発掘4 土偶芸術と信仰』 講談社
- 江藤 昭ほか 1976 『下九沢山谷遺跡』 相模原市下九沢山谷遺跡調査団
- 江藤 昭ほか 1980 『市の沢中崎遺跡』 横浜市の沢中崎遺跡調査団
- 江藤 昭ほか 1980 『下依知大久根遺跡』 下依知大久根遺跡調査団
- 大貫英明ほか 1986 『橋本遺跡 縄文時代編』 相模原市橋本遺跡調査会
- 大野延太郎 1917 「相模発見の土偶」『人類学雑誌』第32巻第2号
- 岡本 勇ほか 1979 『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 岡本 勇 1980 『茅ヶ崎市史』3 考古・民俗編 茅ヶ崎市
- 岡本 勇ほか 1986 『古代のよこはま』横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団編
- 岡本孝之ほか 1977 「尾崎遺跡」神奈川県埋蔵文化財調査報告13 神奈川県教育委員会
- 川上久夫ほか 1976 『港南台』神奈川県埋蔵文化財調査報告9 神奈川県教育委員会
- 小宮恒雄ほか 1990 『全遺跡調査概要』『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告X』 横浜市埋蔵文化財センター
- 近藤真佐夫ほか 1990 『上恩田の遺跡』 日本窯業史研究所
- 坂本 彰ほか 1985 『緑区史』資料編第1巻 緑区史刊行委員会
- 白石浩之ほか 1978 『当麻遺跡・上依知遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告12 神奈川県教育委員会
- 重久淳一ほか 1981 『奈良地区遺跡群Ⅰ』上巻 第1分冊 奈良地区遺跡調査団
- 杉山博久 1985 『秦野市史』別巻考古編
- 鈴木保彦 1983 『東正院遺跡調査報告』神奈川県教育委員会
- 鈴木保彦 1990 「筒形土偶」『季刊 考古学』第30号 雄山閣出版
- 高山 純ほか 1975 「大磯・石神台配石遺構発掘報告書」大磯町教育委員会
- 高山 純ほか 1975 『曾谷吹上』図録編
- 滝沢 亮ほか 1987 「横浜市・西之谷大谷遺跡の調査」『第11回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
- 竹石健二ほか 1989 『岡上丸山遺跡発掘調査報告書』川崎市教育委員会
- 玉口時雄ほか 1988 「川崎市黒川地区遺跡群・宮添遺跡・他の調査」『第13回 神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
- 寺田兼方 1970 『藤沢市史』第1巻資料編 藤沢市
- 永井正憲 1985 『関谷島ノ神遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 二村喜恵子ほか 1982 『受地だいやま遺跡発掘調査概報Ⅰ』奈良地区遺跡調査団
- 野口義麿 1974 「早・前期の土偶」『古代史発掘3 土偶芸術と信仰』 講談社
- 原田昌幸 1987 「発生期の土偶について」土偶とその情報研究会資料
- 宮下健司 1983 「縄文土偶の終焉—容器形土偶の周辺」『信濃』35巻8号

図の出典

- 図1 1, 原田昌幸 1983, 資料5 2, 大貫英明ほか 1986, PL190 3, 岡本孝之ほか 1977, 343
頁第241図 4, 白石浩之ほか 1977, 197頁第163図 5, 杉山博久 1985, 80頁挿図56 6—12,
岡本 勇ほか 1986, 13頁, 81頁 13, 二村喜恵子ほか 1982, 25頁第15図 14, 江藤 昭ほか
1980, 110頁第84図 15, 滝沢 亮ほか 1987, 6頁第1図 16, 江藤 昭ほか 1980, 図版4

- 17, 白石浩之ほか 1978, 96頁78図
- 図2 1, 2, 4—9, 11—13, 16, 大貫英明ほか 1986, PL190, 191, 192 3, 玉口時雄ほか 1988, 表紙 10, 14, 白石浩之ほか 1977, 427頁第374図 15, 二村喜恵子 1982, 25頁第15図
- 図3 1, 5, 6, 鈴木保彦 1983, 157頁第87図, 参考図版第1 2, 3, 植木 弘 1990, 49頁第14図, 52頁第16図 4, 寺田兼方 1970, 51頁第26図 7, 11—13, 岡本 勇ほか 1986, 93頁 8, 9, 14, 岡本 勇ほか 1979, 図版362 10, 川上久夫ほか 1976, 76頁第39図
- 図4 1, 4, 6, 竹石健二ほか 1989, 71頁第61図 2, 5, 杉山博久 1985, 80頁挿図56, 86頁挿図 62 3, 江坂輝弥ほか 1974, 64頁108 7, 寺田兼方 1970, 77頁, 第43図 8, 岡本 勇ほか 1976, 図版361 9, 高山 純ほか 1975, P1, L1 10, 11岡本 勇ほか 1979, 図版364 12, 鈴木保彦 1983, 157頁87図 13, 永井正憲 1985, 52頁第57図
- 図5 1, 2, 赤星直忠 1974, 図版17 3, 岡本 勇ほか 1979, 図版364 4—8, 石井 寛 1979, 127頁第21図

(日本大学芸術学部)